江戸川女子高 29回目 歓喜の舞台へ

春の「第九」息長く

父も 娘も

サントリーホールで行われた2013年3月の第九発表会の様子＝江戸川女子高校提供

ベートーベンの「第九」といえば年末の風物詩だが、江戸川女子高校（江戸川区）は毎年3月に発表会を催している。高校1年生が女声合唱を務め、父親たちが男声合唱、吹奏楽部と弦楽部が演奏を担当。コロナ禍で中止や無聴衆開催が続いたが、29回目の今回は5年ぶりに保護者の前での披露となる。今年は第九がウィーンで初演されて200年の節目だ。

「ダイネ　ツァウベル　ビンデン　ヴィーデル…」。学校施設のかたばみ会館大ホールにドイツ語の歌声が響く。「腕を振りながらビートを感じよう」と佐野直樹教諭(64)の指導が入る。発表会が間近に迫り、高校生が「第九」合唱の練習に励んでいた。

ソプラノを担当する石川亜樹さん(16)は「最初はドイツ語に戸惑いがあったが、練習を重ねて歌えるようになった」、やはりソプラノの大西陽菜子さん(16)は「おなかから声を出すことを心がけている。立派な会場でみんなで歌う本番が待ち遠しい」と語った。

㊤第九発表会に向け合唱の練習をする江戸川女子高の1年生＝いずれも江戸川区の同校で
㊦準備を重ねる吹奏楽部と弦楽部の生徒たち＝同校提供

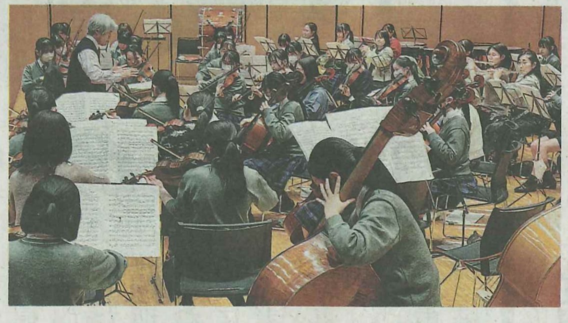
合唱の練習をする父親たち

オケも生徒とOG

「第九」はベートーベンが作曲した交響曲第9番。第4楽章は独唱と合唱を伴って演奏されるため「合唱付き」とも呼ばれる。ベートーベンは歌詞にシラーの詩「歓喜に寄す」を用いたことから「歓喜の歌」としても知られ、原曲歌詞のドイツ語で歌われることが多い。

合唱は生徒315人、保護者と教職員約100人、独唱はプロの歌手4人を招き、オーケストラは吹奏楽部と弦楽部、両部卒業生の約100人が担当する。1時間を超える楽曲を高校生が中心となって演奏するのは並大抵のことではないが、すでに30年近い積み重ねがある。

始めた際、生徒が第九を歌う提案をしたのは吹奏楽部と弦楽部の音楽監督を務める佐野教諭だった。「吹奏楽部の創部10周年公演で第九を演目にし、合唱を高校1年に担当させようとひらめいた」。1994年3月の第1回発表会が好評だったことから翌年以降も続けることになったという。



当時は吹奏楽部しかなかったが、98年に弦楽部を発足させ、オーケストラの形を整えることができた。発表会でチェロ担当の高校2年森彩乃さん(17)は「練習の成果を発揮し、パートを引っ張っていきたい」、クラリネット担当の同2年森嶋美帆さん(17)は「貴重な経験。気持ちを伝えられるように臨みたい」と話した。

合唱の男声パートは在校生・卒業生の父親たちが担当する。「最初は集まらなかったようだが、今では400人の登録がある」と、15年続けて参加している世話人会の高瀬浩之さん(61)。今回で3回目の丹羽浩範さん(50)は「発表会は高1の娘が入学する前から知っていた。今年は娘と一緒なので楽しみ」と語る。

5年ぶりの「聴衆」

2003年の第10回はNHKホール、13年の第20回はサントリーホールが会場だった。20、21年はコロナ禍で中止となり、22、23年は無聴衆で実施された。今回は21日、池袋・東京芸術劇場コンサートホールが晴れの舞台だ。入場は保護者と関係者に限られる。

TOKYO発

文・桜井章夫／写真・田中健、七森祐也
紙面構成・山下洋史